

『今月の天候と農作業』

通巻第5619号
9月号
平成30年9月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

- ・暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は平年並か高い見込みです。
- ・前線や湿った空気の影響を受けやすく、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう

【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は高い確率80%です。2週目は高い確率60%です。3～4週目は高い確率50%です。

<1 週目の予報> 9月8日(土)～ 9月14日(金)

前線や湿った空気の影響で曇りや雨となるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 9月15日(土)～ 9月21日(金)

前線や湿った空気の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 9月22日(土)～ 10月5日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

1 病害虫防除

穂いもちの防除は出穂前と穂揃期頃に必ず行います。葉色が濃い圃場は特に注意が必要です。カメムシは、穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。トビイロウンカは、発生予察情報に注意するとともに圃場毎に株元をよく観察し、適期に防除します。

2 水管理

根の活力を維持し、登熟を良くするため、収穫の5日前迄間断かん水を続けます。この間は落水時でも土が乾くことがないように湿潤状態を保ちます。台風時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後も吹き返しの高温・乾燥風により品質低下が起こる場合もあるので、風が止むまでは湛水を保ちます。倒伏した場合、粃が水面に接すると発芽しやすいので、穂先を隣の株の上に乗せるなどします。

3 収穫

早いところでは中旬頃から収穫作業が始まります。収穫適期は粃全体の8割程度が黄化した頃です。乾燥調製は、高温での急激な乾燥にならないように注意します。仕上げの玄米水分は14.6～15.0%となるようにします。

◆大豆

湿害防止のため、圃場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は紫斑病やカメムシの防除を行います。ハスモンヨトウは老齢幼虫になると薬剤の防除効果も劣るので、観察に努め早めに防除を行います。特に孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に摘み取り処分することも効果的です。

◆そば

1 排水対策

そばは湿害に弱く、長時間滞水や冠水すると生育不良や立枯れが発生するので、排水溝を設け、排水を徹底します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

きゅうり、ピーマンなど施設野菜の定植が始まります。

台風や降雨の多い時期になるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行います。

定植の5～7日前には、畦全体が十分湿るようにかん水します。定植直後は活着を促進するため株元を中心に丁寧にかん水します。なお、定植前のかん水量が不足していると根張りが不十分となり、生育や収量に大きく影響しますので、特に中期展張ハウス等、一年を通して天井ビニルが被覆されているハウスでは注意が必要です。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期となりますが、定植後から収穫開始期までに根を十分に張らせコンパクトな草姿に仕上げることが、収量、品質向上につながります。定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢の調節を行います。また、定植の早い作型では、主枝の摘心期となりますが、摘心を行う1週間前には1回目の追肥を行い、初期の草勢維持を図ります。

◆ピーマン

接木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、通常（12cmポット苗）よりも2週間程度早めに定植を行います。定植後から収穫開始時期までかん水量を3～4割増やすなど草勢を強めに保つ管理が必要です。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となりますが、セル苗を2次育苗せず直接定植するダイレクトセル苗定植が増えています。異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、定植後にかん水量を制限する管理が行われてますが、極端な水切りは初期生育に悪い影響を及ぼしますので、少なめのかん水量で回数を多くします。

◆いちご

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令の影響を受けにくく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃ですので、その2～3日前から検鏡を行います。花芽が分化していることを確認して、9月中旬以降に定植します。

なお、定植は採苗が早く育苗期間の長い苗から順番に行い、炭疽病等の恐れのある苗は早めに除去しましょう。

（黒木 正晶）

葉茎根菜類・いも類

9月はキャベツ、はくさいの定植や、ほうれんそう、だいこん、ごぼう、にんじん等の播種期です。排水性の良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い、発芽揃いや初期生育を促すことが重要です。

生育初期は植物体が小さく雑草との競合に負けやすい上、ネキリムシやチョウ目、甲虫類による食害も多いので、抑草、除草、防除対策は重要です。

◆にんじん

8月播種したものは間引きの時期です。株間は8cm程度を目安に年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し、収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や大雨による土壌や種子の流失で欠株が多い場合は、まき直しを行います。地域により差はありますが、遅くとも9月20日頃までが播種期の限界となります。

◆ほうれんそう

加工用のほうれんそうは下旬より播種適期となります。大柄に生育させるためには、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。土壌酸度は石灰資材を施用してpH7を目標に調整します。播種後、除草剤を処理しますが、土壌が乾燥しすぎると除草剤の効果が劣るので、播種前に適度なかん水を行い、適湿の状態ですら除草剤を散布します。

◆食用かんしょ

普通堀りの収穫期です。生育日数が130日以上になるといもの形や皮色が悪くなります。鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、若齢幼虫期を逃さず農薬防除を行います。

◆さといも疫病対策（次作）

疫病の伝染環を絶つため、収穫が終わったさといもの畑は速やかに片付けます。残さの分解を進めるため、トラクター速度を遅く、ロータリー回転を早くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

（杉村 幸代）

果樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は樹上選果を行いながら、着色や糖度などの地域基準に基づいた出荷を行いましょう。また、カメムシの飛来時期になりますので、特に台風通過後には注意しましょう。

収穫後、秋期の気温が高く推移する場合、秋芽が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋芽が発芽しなくなってしまうので、マルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆完熟きんかん

良好な初期肥大を確保するため、9月末までに摘果を終了しましょう。

今年は開花期加温の実施状況によって、結果時期に差が見られます。結果時期が遅く果実肥大が遅れている園や、夜温が早く低下する中山間地域では、9月下旬から10月上旬にはビニル被覆を行い、昼間の高温管理と夜間の加温（外気温よりも3℃程度高い温度）により、肥大を確保しましょう。

◆マンゴー

今年は後期出荷作型で収穫が遅れたことで、剪定が遅れた園が見られます。剪定直後から夜間の加温や早朝及び夕方の保温を行い、新梢の発生や伸長を促進しましょう。また、枝の緑化遅れは、花芽分化や収量に悪影響を及ぼします。葉面散布で早期緑化を図りましょう。

9月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンは全て開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。

収穫は毎日行い、温度の低い早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭そ病や害虫による被害果の混入を防ぎましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木 美里)

花き

◆秋ギク

「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は、総苞りん片形成後期から4日間実施します。地域や当年の気候によって花芽発達の色度が異なりますので、農業改良普及センターやJAにおいて「花芽分化の検鏡」を必ず行った上で実施してください。

直挿しする穂は、低温伸長性を高め、節間伸長や生育の揃いを良くするために2～4℃で穂冷蔵を行います。なお、穂の傷みを防止するために、冷蔵期間は3週間程度にとどめましょう。

◆スイートピー

上旬より植え付けの時期となります。高温の影響を避けるために、植え付け前は遮光やかん水を行い、あらかじめハウス内の温度や地温を下げるようにします。

植え付け後の水管理については、植え付け後1週間は、乾燥しないように根締めかん水を行い、その後は根の張りを良くするために徐々にかん水間隔を広げてください。

光線管理については、植え付け後7～10日は遮熱性の高い遮光資材で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行ってください。なお、長期の遮光は軟弱徒長につながりますので、生育を見ながら除去しましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域では年内出荷作型の定植期になります。早期抽だいを防ぐために、定植前に遮熱性の高い遮光資材で遮光するとともに十分にかん水を行ってください。

中山間地域で8月上～中旬に定植した作型では、伸長から発蕾時期になります。抽だい後2週間程度は硝酸カルシウム等の液肥を定期的に施用し、株の充実と茎の硬化を図りましょう。

◆トルコギキョウ

沿海地域では年内から年明け出荷作型の定植期になります。苗を定植前に極端に乾燥させたり、高温に遭遇させたりするとロゼットを起こす場合がありますので、定植作業にあわせて苗を育苗施設から移動させ、速やかに定植しましょう。

◆キイチゴ

気温の低下とともに腋芽や新しい枝の伸長が盛んになります。また、ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫の発生が増えますので、フェロモン剤の利用や定期的な防除を行い、品質を高めて安定的な出荷を目指します。

また、樹勢維持のために枝はすべて収穫せず、一部は来年度に向けた株養成のための枝として必ず残します。

◆ホオズキ

白絹病やその他の立ち枯れ病、ウイルスが発生したほ場では、出来る限り残渣をほ場外に持ち出して焼却します。

また、ほ場に残った細かな残渣については、残渣分解資材を散布し、気温が高いうちに耕うんの繰り返しと適切な土壌水分管理で残渣の分解を十分に進めましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜

今月は夏から秋に変わる季節の変わり目で、気温の日較差が大きくなる時期です。また、台風の襲来も予想されるため、十分な対策が必要となります。さらに、暑熱の影響による受胎成績の低下も、この時期にでることから、暑さで体力の落ちた家畜の回復を図るようにしましょう。昼は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑さ対策を行いますが、夜間は急に気温が下がるので、気温差で家畜が体調を崩さないように、温度管理を十分に行いましょう。

乳牛に関しては、ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日チェックし、THI値が67以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかり行います。夜間はTHI値をチェックしながら対策を行いましょう。

豚では、夏期の暑熱による受胎率の低下がみられる時期になりますので、交配期の豚の体調管理と観察を徹底し、受胎成績の改善を図りましょう。また、気温の日較差が広がる季節は、豚や鶏の病気が発生しやすい時期ですので、観察を徹底して疾病の早期発見に努め、早めの対策を行いましょう。

飼養管理の重要事項として、飲水の再点検を行いましょう。特に、水道水を利用していない農場では、水は直ぐに水質が悪化し、疾病発生の一因となりますので、こまめな給水器の清掃に心がけ、新鮮な水が飲めるようにしましょう。

◆飼料作物

牛の粗飼料では台風の襲来が危惧されますが、天候にあわせた収穫作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、年内収穫のエン麦の作付け時期にもなりますので、計画的な作付け作業を行いましょう。

(三角 久志)

特用作物

◆茶

本年は、一番茶摘採が平年より3日程度早く始まり、気温も高めであったため8月の作業は5日程度早い状況でした。これからの作業は、翌年の一番茶収量と品質確保に大変重要です。こまめに茶園を巡回し、作業遅れとならないよう適期に適切な管理を行きましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により寒害(幹割れ・冬芽の凍害等)を受けやすくなります。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1～2トンを施用し軽く耕耘を行きましょう。更に、今年、中切り更新した茶園を除き計画的な深耕を行うと、発根が促進され肥効率の向上にもつながります。

2 病虫害の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。網もち病の多発が予想される際は、四～五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

秋期に多発するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類は、茶園をよく観察し適期防除に努めましょう。

また、県内の茶園ではチャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。茶園を注意深く観察し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 原基づくり

9月～10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します。原基は20℃前後で最もよくできます。

原基の形成促進のため、十分な散水とほだ倒しを行います。原基固定期間(中低温菌:9月下旬～)は、ほた木の移動、天地返し、古ほだ整理を行わず、天地返しは9月中旬までに終了してください。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、南～東南斜面(暖かい方向)、排水が良く適度の湿度が確保できるところ、日光がチラチラ差し込む林内、散水施設のための水源があるところが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい環境にしましょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月の作業は、通常期販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

- 1 出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭・水分の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか出荷物の確認を行きましょう。あわせて販売見込表を作成してください。
また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認も行い、混入している場合は、ピッキングを行きましょう。
貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行きましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。
確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下に注意しましょう。
- 2 良質堆肥 10 a 当たり 1200 kg 以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。
- 3 病害の耕種的防除の徹底を図る為にも夏期耕耘（最低深耕 1 回・耕耘 2 回以上）を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。
また、土壌改良や肥料設計の参考にするために、土壌検定を行きましょう

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病（穂）	並	葉いもちの発生は、発生面積は平年より少なく、程度は平年並みです。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ ※ （秋ウンカ）	やや少	トビイロウンカの発生は、平年に比べやや少となっています。9月の気温は平年より高いと予想されており、今後の天候次第では増殖率が高まることと予想されます。現在、低密度のほ場でも定期的にはほ場を観察し、注意します。 等級低下につながりますので、穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底してください。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
斑点米カメムシ類	やや少		
大豆及び野菜類	ハスモンヨトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫	やや多	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 （アブラムシ類、アサギミマ類、タバココナジラミ類等）	—	アブラムシ類やアサギミマ類およびタバココナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫に対して、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用など、総合的な防除対策に努め徹底防除します。
	キュウリ黄化えそ病（MYSV）	—	シキイロアサギマによって媒介されるキュウリ黄化えそ病（MYSV）の発生が拡大していることから注意が必要です。発病株は伝染源となりますので、速やかに抜き取ります。
促成いちご	炭疽病	—	苗からの持ち込みによる発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株（半径3ポット）も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみ定植します。
さといも	疫病	—	各地で発生が確認されています。早生品種では、次作の発病防止のため、適期収穫と残渣のほ場外への持ち出しを行い、中生および晩生品種では、登録薬剤による定期防除に努めます。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類	黒点病	並	降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を実施します。
	ミカンハダニ チャノキアサギマ	やや少 やや多	ミカンハダニは、平年並の発生です。寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病	やや少	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。 輪斑病は新梢枯死症の原因となりますので、輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～2葉期に防除を行います。
	輪斑病	少	
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホガ チャノキアサギマ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 少 並 やや少	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノホガは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 チャノキアサギマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除が困難です。秋芽の1～2葉期の被害防止に防除の重点をおき、多発時には5～7日間隔で、2回の薬剤散布が必要です。



1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は防除情報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。